The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	道化・愚者/英雄/老賢人 : 名探偵の魅力を探る
Author(s)	光原, 百合
Citation	Osaka Literary Review. 1993, 32, p. 64-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

道化（フール）・愚者／英雄／老賢人
——名探偵の魅力を探る

光原　百合

1　序

名探偵、この魅力的なるもの。名探偵シャーロック・ホームズや金田一耕助の活躍に胸を踊らせた経験のない人は少ないだろう。

日本推理小説の歴史においては、昭和30年代から40年代にかけ、リアルな作風のいわゆる社会派推理小説が全盛となり、そんな中「名探偵」は、現実離れしているという批判のもと一時まったく顧みられなかった。しかしこの批判はかなり的はずれなものだ。名探偵とは、神話における神々や英雄、幻想文学における巨人や妖精と同様、人間の内的真実を描くための存在であって外的なリアルさを求めるべきものではない[1)]。科学がいかに発達しようと、いや、科学が人間を置き去りにして発達した時代だからこそ神話が求められるように、名探偵も簡単に忘れ去られる存在ではない。事実、あまりにも現実に密着しすぎた社会派推理に抗して、昭和50年代以後、現実離れした、だからこそ魅力的な謎を描く小説（島田荘司は『本格ミステリー宣言』p. 54 において、こういった小説を「神秘」の語義に即してミステリーと呼び、リアルな作風の推理小説と区別することを提案している）が復興してきた。こういった作品において、古典的な名探偵に劣らぬ魅力的な探偵たちが活躍を始めたのである。

本論はこの復活してきた名探偵の魅力の源泉を探ることを目的としている。名探偵を現実に存在するとみなした、その活躍の背景や履歴の謎等についての楽しい研究は豊富だが、名探偵の魅力を考えるには、むしろその神話的力のよってきたるところを探るべきではあるまいか。この面からのアプローチ

は従来比較的手薄だったように思える。したがって本論では名探偵をユング心理学でいうところの「元型（アーキタイプ）」的なイメージとしてとらえ、どのような元型の力で名探偵があのような抗しがたい魅力を備えるかを考察する。

2　従来の名探偵観

名探偵の特色をまとめるにあたって、まず今後本論で典型的な名探偵として論議の対象とする予定の名探偵をあげておこう。海外ではシャーロック・ホームズ、ブラウン神父、エルキュール・ポワロ、エラリー・クイーン。彼らを代表的な名探偵とするにはさほど異論はあるまい。国内にも論じたい名探偵は多いが、紙数の関係もあり、ここでは横溝正史の生んだ金田一耕助だけに絞りたい。

彼らの大きな特色となっているのは、性的な無色性である。ホームズやポワロはファンの間でしばしば冗談めかして「ホモセクシュアル説」が取り沙汰されるほど女性に興味を示さず、クイーンに至っては自身が「僕は事実上、性はない」と述べている（『中途の家』p. 302）。ブラウン神父はその職業柄当然だが、その他の探偵もみな独身である。

具体的な名探偵論も見てみよう。ブロウフィーはその「探偵小説 ― 現代の暴力神話か？」において探偵をギリシア神話以来の英雄の伝統の中に位置付け、こう述べている。

> ギリシアの英雄たちは町にやってきて、市民全部が怪物の恐怖におののいているのを知る。探偵は密閉された共同体（家族、ハウス・パーティー、雪に閉ざされた別荘、学校、大学の構内）にやってくる。そこでは殺人事件があり、生き残った人々のすべてが嫌疑をかけられている。（『探偵たちよスパイたちよ』p. 288）

名探偵と英雄には確かに共通性があるが、大きな相違も指摘しておかなければならない。西洋の伝統的な英雄は、何らかの試練を課せられるのが常である。試練の克服が彼にとっての成長であり、イニシエーションである。そ

して苦難の末その試練を克服したあと、即位等自分の立場にも大きな変化を生じ多くの場合伴侶を得て（女性性との結合）新たな秩序の確立に携わる。一方名探偵は、難事件という「挑戦」は受けるが、これは名探偵自身に課せられた「試練」とは言えない。名探偵はあくまでアウトサイダーであり、事件に対しても客観的な立場をとる。当事者のように苦悩することなく、ときに冷淡にさえ思えるほどの客観性を見せるのは名探偵の特徴である。また、名探偵はその立場に基本的に変化を被らず、その場に定着することもまずない。名探偵とは本質的に、事件を求めてさまよう永遠の放浪者である。これは名探偵を論じる上で大きなポイントとなる特徴である。だが、英雄と名探偵、あるいは「探偵」には確かに興味深い関係がある。その点については 3.2 で述べることになろう。

また、名探偵のアウトサイダーぶりは次のような見方も可能にする。

> うろ覚えで恐縮だが、以前横溝正史の発言にこんなふうなものがあったと記憶する。
>
> 「私の小説の主人公は金田一探偵ではありません。その殺しを引き起こさざるを得なかった犯人や、被害者であります。探偵の金田一君はただのストーリーの狂言回し役にすぎません」
>
> かって一世を風靡した金田一耕助ですら、それらの作品の主役ではなかったようである。事件を解説するだけの、野球中継で言えば選手ではなくて、野球解説者か無色透明のアナウンサーのごとき存在のようである。（鼬晶「主張する探偵たち」『矢吹駆研究第１集』p. 7)。

キングズリー・エイミスがエラリー・クイーンを批判して「物語のカメラ」（『探偵たちよスパイたちよ』p. 114）と述べているのも鼬氏とほぼ同じ主旨と考えられる。名探偵は、もっとも主要な登場人物でありながら「主役」ではなく、事件から一歩ひいた客観性をもつ ― この点については筆者の意見も一致している。ただし私見はこの二氏とは違い、名探偵は野球における解説者や単なるカメラよりはるかに作品世界にコミットしていると考える。この点についても 3.2 で詳しくのべることになる。

さて、名探偵の特色を項目にまとめれば次のようになる。

①性的に無色である。

②永遠の放浪者。アウトサイダー。

③主人公でない、客観的な立場。

では次節において、以上の点を念頭におきながら名探偵と元型とのかかわりを論じていきたい。

3　名探偵と元型

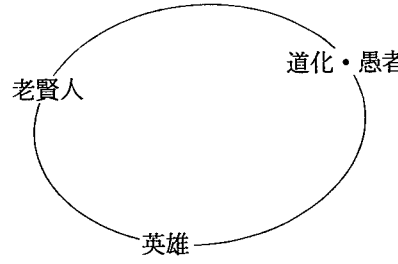
3.1 名探偵にかかわる元型

元型[2] は何種類ある、と固定的に規定されるものではない。夢の数だけ、あるいは神話の数だけ元型は存在するとも言われる。しかし代表的な元型として、ペルソナ、シャドウ、グレートマザー、トリックスター、老賢人等がよく知られている。前節で述べた名探偵の性質から考えて、名探偵イメージの根幹をなしている元型として特に重要なのはトリックスターと老賢人と考えられる。

トリックスターとは神話や伝説の世界で活躍する道化的存在である。筆者はトリックスターを「道化・愚者」(英語ならばどちらも fool) の一種ととらえる[3]。彼らは固定した既存の枠組みを破壊する役割をもつ。それはときに旧体制を打ち倒す場合もあり、また逆に、旧体制に新しい生命を与えて再生させる場合もある。本論ではこの元型を民話世界に限るのでなく、たとえばシェークスピアの作品に登場する道化にも働くもの[4] としてとらえるため、一般的なトリックスターという呼び方ではなく、より広い「道化・愚者」という呼び方を使用したい。

老賢人とは、文字どおり、年老いた高い叡知の持ち主としてイメージされる元型である。自分たちが行動するよりむしろ若者を教え導く機能をもち、その点、充足した魂、「自己（セルフ）」元型の現れと考えてもよい。小此木啓吾は日本人に身近な老賢人のイメージとして水戸黄門をあげている（『英雄の心理学』p.p. 26-39）。

名探偵と「道化・愚者」及び「老賢人」とのかかわりを考察する前に、まずこの二つの元型の関係を考えてみよう。その際、バーバラ・グリーンフィールドによる「元型的な男性性 ― その神話と女性に対する意味」という論文が非常に参考になる。グリーンフィールドはアニムス、つまり元型的な男性性は「自我発達のさまざまな段階に対応する多様な形態をとって表現される。少年、ドン・ファン、トリックスター、英雄、父親、老賢人などである」（『父親』p. 256）と述べている。そして、老賢人にまで発達した男性性は「ウロボロスに戻り」（p. 256）また新しいサイクルが始まるとする。これは大体、少年から成年、老年へと進んで行く現実の男性のライフサイクルにも対応している。この元型的イメージの変遷は本論を展開するうえにおいても大いに示唆に富む。名探偵に投影されるイメージも単一なものではなく複数のイメージが重なる場合、また変遷する場合もあるからだ。グリーンフィールドにおいては、男性性を女性とのかかわりという点から見ているため、女性を誘惑する存在としてのトリックスターと保護あるいは支配する存在としての父親を重視しているが、女性とのかかわりが薄い名探偵を論じる場合は違った視点が必要となる。私論では名探偵を考えるうえで重要な元型を、前述した「道化・愚者」と「老賢人」そして「英雄」と考え、次のようなサイクルを描いてみた。



グリーンフィールドの論における少年、ドン・ファン、トリックスターなどの段階は、本論では「道化・愚者」に対応する。

次に英雄という元型がある。グリーンフィールドはこの英雄という元型をトリックスターと父親の中間に位置するものとしている。英雄にも、たとえ

ば遍歴の騎士や西部劇の「シェーン」のように、果てしない放浪をするものと、前述のギリシャ神話の英雄のように定着して新たな秩序（家族）を形成するものがある。小此木啓吾は前述の書で、前者のような英雄を「成熟した大人の愛欲をまだ持たない、少年的な純粋さとナルシシズムを美化したものだという解釈があると思う」(p. 22) と述べている。確かに、このサイクル上の位置から考えると前者は永遠の放浪者である「道化・愚者」側に近く、後者は安定・秩序を指向する「父親」側に近いと考えられる。

英雄の次に来るはずの父親は、名探偵においてはほとんど意味を持たないが、これはなかなか興味深い論点となる。この点については後述する。

私案の名探偵サイクルで次に登場するのは老賢人である。老賢人の先は道化・愚者につながって、グリーンフィールドの説と同様円環をなす[5]。道化・愚者元型は若さを、老賢人は年輪を内包するので、老賢人のほうがより成熟した像と考えてもさしつかえないが、必ずしも道化・愚者を価値の低いものととらえるわけではない。また、老賢人と道化・愚者との間にはっきりした境目を設ける必要はないとおもわれる。この二つの元型を負ったイメージは、きわめて軽やかに双方を行き来するからだ。大賢は大愚に似るという言葉もこれを指すのであろう。そういえば水戸黄門の漫遊記はトリックスターの永遠の放浪を思わせる部分もある。そしてこのご隠居様は、しばしば子供じみた駄々をこねてはお供の者を困らせるのである。

3.2 名探偵と元型

それでは以上に述べた元型と名探偵とのかかわりを論じてみよう。

まず「道化・愚者」元型である[6]。「道化・愚者」とは一面未熟・未発達・innocent な存在である。性的に分化もしておらず、したがって両性具有的である。まだ本質的に何かにコミットすることがなく、常にアウトサイダー・異邦人である。そしてそれゆえに客観的な立場をとることもできる。だが、一方向的な発達主義の立場から見た場合、この段階は「未発達」ということになるが、全体をひとつの円環と見る立場をとれば、これはこれで一つの完

成を示す姿といえる。たとえばシェークスピアの道化も、無知ゆえに愚かな言動をする場合もあるが、実はすべてを見通す知恵の持ち主で、何もかも知った上で皮肉を浴びせている場合もある。無知の知、あるいは wise fool といった逆説的存在が「道化・愚者」である。古来からの象徴体系の集大成といえるタロットカードには「愚者（Fool）」という非常に重要なカードが存在する。「永遠に放浪する若者」を描いたこのカードは、「未熟、愚かしさ」を寓意するという解釈と「最高の叡知」を寓意するという解釈が存在する、まさに逆説的なカードなのである[7]。「Fool」とはまさにそういう存在なのだ。サーカスに見られる間抜けなピエロ像は「道化・愚者」のほんの一部でしかない。いや、そのピエロでさえ、こちらの見方によってはすべてを見透かした悲哀をにじませてないと言い切れるだろうか。

以上の特色は前述した名探偵の特色と見事に共通していることがわかる。名探偵が女性に興味を示さないのは自己完結的な両性具有性の現れである。またそれと同時に、異性のパートナーを得ることはとりもなおさず定住とコミットメントの始まりであり、異邦人性・客観性の保持に反するためでもあろう。そして名探偵は、常識にとらわれずすべてを見通す知恵をもつがゆえに、しばしば周囲から変人扱いされる。これも wise fool の像といえる。そして、「永遠の放浪者」であること。

老賢人も道化・愚者に劣らず名探偵に大きく投影される。名探偵にさっそうとしたヒーローというイメージを持つ向きには意外なことだが、名探偵には案外高齢者が多い。ポワロしかり、ブラウン神父しかり、文字どおり老賢人である。老賢人も両性具有性を示すが、これは「道化・愚者」のように未分化というよりも、むしろ一旦男性性を確立させたのちに女性性をとりいれた結果の理想像としての両性性と考えてよい。登場当時から高齢である名探偵に穏やかで柔らかい雰囲気の人物が多いのは、この女性性との結合が無縁ではないと考えられる。ポワロが非常に細かいことに気を配り、「中年女性みたい」などと揶揄されるのも、このことの戯画化された表現ではないか。そしてまた老賢人は、自らが中心となって活躍するより、むしろ次世代の若

者を教え導くという客観性をもつ。つまり両性具有性、客観性など名探偵に見られる「愚者・道化」的特徴は、かなり老賢人にもあてはまるのである。そもそも 3.1 でも述べたように、老賢人と愚者・道化は wise fool におけるがごとく時にきわめて近接するものなのだ。

ここにおいて、2 で述べた「主人公ではないが解説より重要」とする私見のポイントも明らかであろう。目立った活動をしないから重要でないとは限らない。名探偵とはまさに、「自己」の顕現である老賢人のイメージとして、作品を支え、迷える若き主人公たちを教え導く。主人公ではないがそれより重要な存在になりうるのである。

さて、では「英雄」はどうであろうか。もちろん俗な意味合いにおける「カッコよさ」、ヒーロー性を多くの名探偵がもつことに疑問の余地はないが、やはりイニシエーションの当事者になるか否かの点で英雄と名探偵に大きな違いがあることも無視できない。だが、英雄を論じる上で意義深い一連の「探偵」たちがいる。ハードボイルド作品に登場する私立探偵である。最も代表的なのはレイモンド・チャンドラーのフィリップ・マーロウであろう。彼らはときに名探偵をも凌駕する魅力に満ちた人物像であるが、一般的に「名探偵」とは呼ばれない。彼らと「名探偵」との違いはどこにあるのだろうか。

まず、ハードボイルド探偵は事件に巻き込まれ、「当事者」になってしまう。渦中の人物との関係もあくまで対等であり、老賢人のように見守るという余裕はない。そしてまた、多くの場合「ワトソン役」つまり語り手の目を通して描かれるため心の内部が読者には伝わらない名探偵と違い、ハードボイルド探偵は必ずといっていいほど一人称小説に登場する。その苦悩も迷いも読者にストレートに伝わってくる。最後に、ハードボイルド探偵は自己完結的な名探偵と違い、女性との関係も豊富である。

こうして考えると、ハードボイルド探偵とは英雄的な要素を色濃くもった探偵であると言えそうに思える。自らに課せられた試練において、その苦悩において、そして自分の外部の女性性との出会いにおいて。もちろんハード

ボイルド探偵も体制・秩序側に定着することはあり得ないので、ギリシャ神話の英雄よりむしろ、前述した永遠の放浪者性を残した遍歴の騎士的英雄に近い[8)]。

逆に日本語の「名探偵」という言葉で喚起されるイメージは、単に「すぐれた探偵」を意味するのでなく、すでに何度も述べたように、英雄という元型よりも「道化・愚者」及び「老賢人」という元型の投影を色濃く受けたものである。「名」がつくか否かはここで分かれると言っていい。

最後に、英雄の次の段階としてグリーンフィールドにおいては非常に重要な扱いを受けている「父親」が名探偵にはあまり投影されない理由も、なかなか興味深い論点となる。

典型的な父親像は名探偵とはかなり違った存在である。すでに述べたように名探偵は父親にあるような定着、秩序確立といった機能や、女性（この場合「母親」というべきか）というパートナーを持たないこと。そしてもう一つ興味深い点がある。特に西洋における父親像は、秩序内にいるものを教え導くという機能と表裏一体のものとして、秩序維持のためそれに反するものを「裁き、罰する」という重要な機能を持つ。ところがこの要素は、一見意外かも知れないが、名探偵にはきわめて希薄である。事件を解決し犯人をつかまえる、「裁く」という機能にきわめて近い役割を持つと思われるにもかかわらず、である。

探偵を動かすのは、ある場合はそれが難事件であるということで刺激された名探偵自身の知的好奇心である。この動機は「道化・愚者」的探偵に大きいと思われる。また、ある場合名探偵を動かすのは、事件に巻き込まれた人々の生命を、あるいは名誉を魂を守ろうとするきわめて個人的な動機である。この動機も犯人を裁くという機能とは必ずしも一致しない。したがって犯人側の事情を理解すれば、名探偵は犯人に共感することさえある。このような理解・共感という機能はむしろ母性的なものさえ感じさせ、女性的原理をバランスよく受け入れて両性具有的存在となった老賢人の像にふさわしい。

4　まとめ

名探偵の魅力をさぐる上で、「道化・愚者」及び「老賢人」というそれ自体魅力的な元型を用い、こういった元型のイメージ投影が名探偵に神話的・普遍的な輝きを与えると論じてきた。今回は紙数の都合で及ばなかったが、次回論文では、このような元型が具体的な個々の名探偵にどのような魅力を与えているかを、名探偵や推理小説の分野に限らず幅広いキャラクターと比較しながら記述していく予定である。

(注)

1)　島田荘司はこう述べている。「名探偵などというものこそ、最も神話的人物なのだ。 神々を描こうとする決意がないなら、名探偵など登場させないほうがよい」(『本格ミステリー宣言』p. 54)

2)　元型を一言で説明することは難しいがユング本人は、集合無意識内に存在してイメージを形成する「結晶の軸」のようなものと述べている。詳細は河合『無意識の構造』pp. 84-88 参照。

3)　「…無骨な田舎者、お調子者、トリックスター、答(しもと)、そしてスケープゴートとして、フールは世界に、そして世界の想像的表現もろもろの中にかくも繰り返し繰り返し立ち現れてくる…」(ウィルフォード『道化と笏杖』p. 13)

4)　野島は「道化ハムレット」(『文芸読本・シェクスピア』p. 142) において、道化の機能を「『見かけ』の裏に『真実』を見」てとること、および「『見かけ』を『見かけ』として維持する」こととしている。

5)　ただし筆者はこの変還を一方向的なものでなく、双方向的な移動が有り得るものだととらえている。

6)　道化の民族学的機能については山口昌男の著作に、また心理学的機能については河合隼雄の『影の現象学』に詳しい。ことに道化の自己完結性・客観性等については『影の現象学』第4章に見事に論じられている。

7)「おそらく彼(愚者)はもはや世界現象の舞踏を飽きるほど味わいつくしてしまったのだ。もはやこのような糧を求めることはない。彼は回転と変身を解脱しているのだ」(ベルヌーリ『錬金術―タロットと愚者の旅』p. 205)

8)　ハードボイルド探偵を騎士に見立てる見方はかなり一般的である。たとえばハヤカワ・ミステリ文庫の、ハードボイルド小説広告のキャッチコピーには「卑しき街を行く誇り高き騎士――」とある。

＜参考文献＞

秋山さと子(1987)『聖なる男女』青土社
ベルヌーリ、R.（1972)『錬金術――タロットと愚者の旅』（種村季弘訳）青土社
鎌田東二（1988）『翁童論』新曜社
河合隼雄（1976）『影の現象学』思索社
――――（1977）『無意識の構造』中央公論社
丸谷才一篇（1991）『探偵たちよスパイたちよ』文春文庫
光原百合（1992）「ミステリーの逆説、逆説のミステリー」待兼山論叢第26号　大阪大学刊
野島秀勝（1971）「道化ハムレット」『文芸読本・シェイクスピア』（1985）河出書房
小此木啓吾（1984）『英雄の心理学』 PHP 研究所
クイーン、E.（1962）『中途の家』（井上勇訳）東京創元社
サミュエルズ、A.（1987）『父親』（小川捷之監訳）紀伊国屋書店
島田荘司（1989）『本格ミステリー宣言』講談社
手塚隆幸編（1993）『矢吹駆研究』
ウィルフォード、W.（1983）『道化と笏杖』（高山宏訳）晶文社
山口昌男（1975）『道化の民族学』新潮社
山路・松島・原田（1986）『物語の迷宮―ミステリーの詩学』有斐閣